

発話の意味について

—理解から解釈へ—

井上 次夫

On the Meaning of Utterance

—interpretation from understanding—

Tsugio INOUE

In this paper, I analyze the utterance meaning and interpretation process.

First of all, I will explain principles that sentence turns utterance by the effect of non-language factors, such as context.

For example, 'itai ! (Ouch!)' from a sense of pain, listeners take it as some of their message transmission.

That is the interpretation of the sentence meaning by using the relationship of speaker and hearer, intention such as 'request', 'instruction' and 'blame'. Thus we make an interpretation the utterance meaning using context and common world knowledge.

Then, I will consider the deductive reasoning required contents to interpret the intent of the utterances in relevance theory adjacent.

Finally, I show examples of the irony and observe particular intentions of speakers in the language analysis.

1. はじめに

本稿は、発話の意味を文字通りの意味の理解から話し手によって託された意図の解釈へと拡大する語用論 (pragmatics) の立場から、発話の意味解釈過程について考察するものである。

最初に発話と伝達の関係、次に伝達における理解と解釈の関係について基礎となる考察を行った後、具体的な発話の意味解釈過程の様子を観察するものとする。ここでは、発話行為及び発話態度の意味解釈について具体的な考察を行う。

2. 発話と伝達

2. 1 主客未分化の発話文

感情形容詞、例えば「痛い」という語は「痛い!」「痛い。」「痛い?」と発話されたとき初めて語から言語主体の<痛覚>を表出する文 (1 語文) に成り上がる。「痛い」という語は「!」「。」「?」によって文に成り上がると言ってもよい。

いま、発話文「痛い!」について見ると、これは話し手の主観的表現であって、客観的表現ではない。すなわち、「痛い!」は話し手自身の身体感覚である<痛覚>を言い表しており、それに基づいて「とても痛い。」「少し痛い。」「あまり痛くない。」というような

「痛さ (痛み)」の程度が表現されていくのである。具体的な注射の場面を例に考えると、注射針が皮膚に直接に刺さった結果、注射された人は「痛い」という<痛覚>を覚える。

ところが、通常、大人が幼児につめくられても痛くはないのに対し、大人からつめくられると痛さを感じる。逆に、幼児が大人につめくられると痛さを感じるであろう。この場合、実際にはつめくる強さ・部位・方法等も少なからず影響はするだろうが、「痛さ (痛み)」の感じ方は人によって異なると言える。つまり、同一条件でのつめくりも人によって「痛さ (痛み)」の感じ方の程度が異なり、それに伴って言語表現も異なってくるということになる。さらに、「痛さ (痛み)」の標準や基準といったものを客観的に決定することは難しいことから、「痛さ (痛み)」の感じ方や程度は、他の人との比較において相対的に決定されるのではなく、当の本人の判断にすべて委ねられ決定されると言うことができる。

以上のことから、発話文「痛い!」の語「痛い」が感情形容詞であり、主観的表現であって客観的表現でないことが確認されるのである。

いっぽう、実際の言語使用の場において発せられた「痛い!」という発話文 (1 語文) の表現性を考えると、これは主客未分化の表現である。つまり、「痛い」という<サマ (様)>が話し手の主体的な把握によって断言されている¹⁾。では、このような主客未分

化の発話文は、対自的に完結するのであるのか、それとも対他的に伝達の機能を持つのであろうか。

2. 2 発話文とコンテキスト

前項の「痛い!」という発話文には、発話である限りにおいてその発話が行われたコンテキスト(文脈)が存在する。そして、そのコンテキストには聞き手が存在しない場合と聞き手が存在する場合が考えられる。まず、聞き手が存在しない場合、「痛い!」という発話は、例えば、ピンを踏んだり柱にぶつかったりした場合の自己完結的行為の結果による<痛覚>の表出である。すなわち、話し手自身の感じた<痛覚>を単に言語表現として表出したに過ぎないことになる。したがって、「痛い!」は文字通りの<痛覚>の表出といった意味を担うのみである。

これに対し、「痛い!」という発話の場に聞き手が存在する場合、発話文「痛い!」の担う意味が単に<痛覚>の表出にとどまらなくなる。もちろん、1つの場合として、聞き手が存在するにもかかわらず、上述のような聞き手を意識しない対自的な<痛覚>の表出ということは考えられるだろう。しかし、発話の場に聞き手が存在する以上、そのこと自体が対他的であるとして捉えられるため、話し手のみの発話(独話)に比べ、その発話文は聞き手に対する何かしらの意図的意味を持つ可能性が大きく開かれることになる。

上述のピンを踏んでのどっさの発話文「痛い!」であっても、すなわち話し手の意図的意味を含意しないと考えられる場合、また実際にそうである場合であったとしても、その発話文は聞き手に対し、例えば「早くピンヲ抜イテクレ」「手当テヲ頼ム」「コンナトコロニピンヲ置イテオクナ」等の<依頼>や<非難>といった理解を聞き手に引き起こす可能性が生ずるのである。これは、発話文そのものが聞き手の理解を必ずしも規定するわけではないけれども、発話文が聞き手に及ぼす影響の可能性として否応なしに認めざるを得ない。つまり、この場合、その場の聞き手は単に「ああ、痛いんだなあ。」「どうして痛いのか。」「等と返答するのでは済まされない。

あるいは、単に話し手の足を偶然に(無意識のうちに)聞き手が踏んだ場合であっても、発話文「痛い!」は「早く足ヲケテクレ」「足ヲ踏ムノヲヤメロ」「足ヲ踏ムトハヒドイ奴ダ」といった話し手の意図的な意味(<依頼><命令><非難>)を含意し得るものであり、また聞き手にそのような理解を引き起こさせる可能性が生ずることを否定することはできない。

このように、発話の場に聞き手が存在する場合は、聞き手不在の場合に比べてコンテキストに広がりが生ずるために発話の意味の理解にも広がりに伴うのだと言ってよい。その広がりというのは、発話文に託す話し手から聞き手への意図的意味、そして、発話文から受け取る聞き手による話し手の意図的意味の理解という二者を含む。この結果、発話の場においては、いわゆる対話・伝達の世界における相互理解が必要とされることになる。

2. 3 伝達行為としての発話文

ここではあらためて発話の伝達性という観点から、前項と同様、聞き手不在の場合と聞き手存在の場合について、発話文(1語文)の意図的意味を例に考察を進める。

いま、聞き手不在の場合、発話は文字通り「独り言(内言)」であり、話し手の感情・判断等の表出にとどまるものであろう。例えば「うなぎ。」「雨だ。」といった発話文は、うなぎを目前にして、あるいは雨が降り出したのを目にして、そのモノ(うなぎ)、事態(雨降り)を主体のリアリティー(現実性)としてそのままに言語を介して表現し描写したのであると言える。そこに、話し手から聞き手への意図的意味といったものはおよそ想定されない。つまり、働きかけの対象たる聞き手が存在しないのであるから、働きかけの意図も存在しないと考えられるのである。仮に「ウナギガ食ベタイ。」「雨ノタメニ出カケルコトガデキズ、困ルノデ傘ガホシイ。」というような話し手の心理、判断の存在することが事実だとしても、先の発話文から一義的にその解釈を得ることは通常、困難である。なぜなら、「独り言(内言)」の心理、判断は話し手以外の知るところではなく、その話し手においてもそれらを絶えず意識的に掌握し切れるものではないと考えられるからである。なお、それがテレビや映画、演劇、小説等の登場人物の発話文であってみれば、例えばコンテキストが手がかりとなる可能性もなくなかろうが、その場合、それが恣意的理解にならないとする確証はどこにもないだろう。また実際、そのようなコンテキストを導き出すこと自体が必ずしも容易ではない。いっぽう、話し手の意図的意味が含まれないにもかかわらず、偶然にも伝達された意図的意味が生ずる場合、それは聞き手による誤解または曲解として現実のコミュニケーションの場において時に生ずることがあるとしなければならないことではある。

これに対して、発話の場に聞き手が存在する場合、発話文が働きかけの機能を帯びるのが通常である。このため、その発話は伝達行為となる。先に例として挙げた「うなぎ。」「雨だ。」といった発話文は、その意図的意味の確定に一定の手続きを要するとはいえ、聞き手が存在する以上、通常、何かしらの意図的意味を有していると考えられるものである。すると、このような発話において「発話・伝達のモダリティ」が発話文の必須要件となることは言うまでもない。なお、話し手自身を内面の聞き手すなわち伝達の相手とする「独り言(内言)」のような場合、聞き手が存在する場合と同じく伝達行為とすることができるけれども、特殊なあり方である。したがって、本稿においては以後、発話を聞き手が存在する通常の場合に限定して議論を進めることにする。

3. 理解と解釈

発話とは、あるコンテキストにおいて話し手が聞き手に向かって話し手の意図を発話文によって伝達する行為であるとする²⁾。このとき、聞き手は発話を受けとめてそれを理解するのであるが、その理解には二様がある。1つは発話文が持つ一般的な意味(文字通

りの意味)に対する「理解」であり、もう1つは発話文が帯びる個別的意味(話し手の意図の意味)に対する「理解」である。前者の理解は「文字通りの意味」と対応して一般性を持つものであるが、後者の理解は「話し手の意図の意味」と対応するような一般性を持たず、個別的・臨時的なものである。ただし、そのように截然と区別し得ない中間的な場合やある程度、個別的・臨時的なものが慣習化した特別な例外的な場合も認められる。しかし、本稿では先の両者の相違を明示するために、以下、前者を「理解」、後者を「解釈」と呼び分けることにする。

では、以下、対話における発話の理解と解釈について具体的な考察を行う³⁾。

- (1) A: Do you have a pen? ペンをお持ちですか。
B: Yes, I do. / No, I don't. はい。/いいえ。

(1A)の発話の意味は、日本語訳で示された「ペンをお持ちですか。」であるとまずは答えることができる。事実、英会話の対話練習等ではそのようなやり取りが行われており、問題はない。また、(1A)の発話が相手(1B)にペンの所有の有無を尋ねる疑問文であるという限りにおいて(1B)は正しい返答である。ただし、これは文字通りの意味を持つ発話の問答としての場合である。

ところが、(1)のような対話は、教室での教師と生徒、またはペンの所有率調査等といった特殊なコンテキストを除き、日常生活で茶飯に見られるものではない。これが仮に、例えば書類に何か記入しようとした(1A)がかばんの中やポケットのあちらこちらに手をやって筆記具を探した後に、隣にいた(1B)に向かって発したものであるならば、おそらく(1B)は次の(2B)のように発話しながらペンを差し出すことであろう。

- (2) A: Do you have a pen? ペンをお持ちですか。
B: Sure. Here you are. ええ、どうぞ。

すなわち、(2B)は、(2A)の発話を文字通りにペンの所有の有無を尋ねる意味の発話文であると「理解」するいっぽう、「私はペンが必要なだけでも、あいにくいま持ち合わせていないので、もしもあなたがペンをお持ちならば貸してもらいたい」とでもいったような<依頼>を表す発話文として「解釈」したと言えるのである。このように、実際のコミュニケーションの成立のためには、発話文の文字通りの意味 (sentence meaning) の理解にとどまらず、その発話に託された話し手の意図の意味 (speaker meaning) を「解釈」することが求められるのである。

こうしてみると、(1A)及び(2A)の発話の意味は、それが発せられた具体的な状況、場面、脈絡すなわちコンテキストを考慮に入れるか否かにその「解釈」は依存する。コンテキストを捨象し、そこで使用された言語表現だけを取り出してその文字通りの意味を考えて「理解」していこうとするのが意味論の立場であった。したがっ

て、意味論が取り扱ってきた意味とは、文字通りの意味であり、極めて限定された意味であったとすることができる。これに対して、コンテキストを捨象するのではなく、むしろそれを積極的に言語の意味の場に取り入れて「解釈」していこうとするのが語用論における拡大した意味研究の立場であるということになる。

4. 「話し手の意図の意味」の解釈過程

「話し手の意図の意味」の解釈とは、「文字通りの意味」の理解とは異なり、発話者・相手・コンテキストといった非言語的な要因をも勘案して解釈するものである。意図の意味は、発話行為によるものと発話態度によるものとに分かれる。

4. 1 発話行為の意味解釈

発話者は、発話文を用いて発話行為を行う。そのとき、発話者が発話文に託した意図の意味は具体的にどのような解釈過程を経て相手に理解されることになるのであろうか。

- (3) A: Do you like “sumo”? 相撲は好きかい？
B: I am a Japanese. 日本人だからね。

この発話文(3A)の意味は、文字通りには相撲の好悪を尋ねるものとして理解される。そして、それ以外の理解を導出することは、この場合、非言語的な要因(発話者・相手・コンテキスト)を想定した上での理解の可能性を示すことであり、それはつまり、語用論的解釈を行うことなのである。このとき、理論上、(3A)についての解釈の可能性は際限なく開かれていることになる。ところが、実際の言語使用の場においてはそのような一見とりとめもないはずの解釈がほとんど一義的に行われているのが通常でもある。これは実際の言語使用の場においては上述の非言語的な要因が存在し、解釈の規定要因として働くことに起因するのだと考えられる。

事実、それは(3B)の返答によって確認ができる。言い換えると、この場合、(3A)の発話文に対して(3B)が行った理解と解釈は<尋ね>に対する<こたえ>という点で一致している。そして、私たち観察者にとっては、(3B)の返答が非言語的な要因であるコンテキストを創出し、(3A)の発話意図の解釈を導出する重要な手がかりとなっているのである。もちろん、その解釈が真実、(3A)による(3B)に対しての相撲の好悪についての<尋ね>であったという保証を与えるものではないにしても、観察者にとって(3A)の発話の意図の意味、つまり「発話意図」を推論し、解釈するに際しての重要な手がかりを与えるものであると言わざるを得ないのである。

ところで、(3A)の発話意図が文字通りに相撲の好悪の<尋ね>であるとき、(3B)はどうして「ああ、好きだよ。」とか「いや、あまり好きではない。」等の肯否表現を用いず、「日本人だからね。」といった理由を述べる形式の間接的返答をしたのであろうか。

このことを発話意図と表現形式の選択という観点から、関連性

理論 (relevance theory) を参照しながら考えてみよう。

まず、(3B)はその間接表現によって何らかの「表現効果」を期待しているのではないかと考えられる。なぜなら、間接表現の理解の処理には直接表現の場合と比べて大きな労力が要求される。したがって、そこにはそのような処理労力に見合うだけの効果が期待されていると考えられるのである。

次に、「そのような間接表現を用いたとしても、発話意図は(3A)に解釈されるであろう」という(3B)の「見込み」が考えられる。つまり(3B)は、(3A)との間に「相撲は日本の国技であり、たいいていの日本人は相撲が好きである」という共有知識があると仮定していると言える。そのような共有知識を「文化的コンテキスト」と言うこともできる。したがって、仮に(3A)が日本語を知らない外国人であるとしたら、(3B)はおそらく直接的な肯否表現の返答を行い、共有知識 (文化的コンテキスト) を必要とする(3B)のような間接的返答はしなかったであろうと考えられる。

以上から、発話文(3B)は(3A)の<尋ね>に対して強く関連付けて解釈されることになる。その結果、(3)が日本人同士の対話とするならば、(3B)が熱烈な相撲ファンであるとさえ(3A)は解釈することになるものと思われる。

では、(3B)のような間接的返答に対して(3A)はどのような解釈過程を経て、(3B)が熱烈な相撲ファンであるとさえ推論するのかを以下に具体的に検討してみよう。

まず、(3B)が(3A)の発話に続いて行われた発話であることから、通常、(3B)が(3A)に対して何らかの関連があると仮定される。すると、いま(3A)が<尋ね>を表す文であるため、(3B)はそれに対する何らかの<こたえ>を表す文であると考えられる。(3B)の文意は、日本語訳が示すものである。そこには、理由を表す「から」の使用、発話・伝達のモダリティ (対他的働きかけ) を表示する助詞「ね」の使用が認められ、(3A)と(3B)との関連性の証拠となっている。ただし、このような有標の言語形式が常に与えられるとは限らない。実際、英文を見た場合、そのような標識は認められない⁴⁾。

次に、(3B)が(3A)の<尋ね>に対する協調的かつ誠実な<こたえ>であるという仮定と実際の発話文(3B)の意味とを折り合わせる (整合させる) ためには、次の(4)に示すような「(3B)の確信」を想定するほかない。つまり、(3B)は(3A)の解釈能力に依存しているのである。

(4) (3B)の確信

- ① 日本人であるということから考えて相撲の好悪は明らかである。
- ② 日本人であることは A の<尋ね>に対する<こたえ>の解釈の手がかりとなる。

いっぽう、(3A)は「相撲は日本の国技である」「相撲は日本人に人気がある」といった知識を文化的コンテキストから引き出し、それらから「本国人はその国技が好きである／日本人は日本の国技で

ある相撲が好きである」と仮定し、その仮定と返答者(3B)が日本人であるという(3B)の発話内容とから、次の演繹的推論を行う。

- (5) 前提：日本人は相撲が好きである。

(3B)は日本人である。

結論：(3B)は相撲が好きである。

仮に、以上のような推論が「関連性」という仮定に基づいて行われるのであれば、会話における隣接発話には首尾一貫性のない、ばらばらのものが続出することになる。

以上、<尋ね>の文について見てきたが、形式上<尋ね>を表す文、すなわち疑問文が発話意図として<誘いかけ>を表す場合についても同様にしておこう。

- (6) A : Do you like “sumo”? 相撲は好きかい？

B : I should finish my work. 仕事があるんだけど。

先の(3A)は相手に対する相撲の好悪についての<尋ね>であると理解され、解釈されたのに対し、(6A)は相手に対する相撲の好悪の<尋ね>ではなく、相撲観戦への<誘いかけ>であると解釈される。すなわち、文の種類は同じ疑問文でありながら、(3A)の発話意図は<尋ね>であり、(6A)の発話意図は<誘いかけ>である。これは、相手である(6B)の<こたえ>が発話のコンテキストを形成し、私たち観察者が(6B)の<こたえ>を(6A)の発話意図の解釈の手がかりとしていることに起因する。

では、実際、<尋ね>を意味する疑問文(6A)をどのような過程を踏んでその発話意図が<誘いかけ>であると(6B)は解釈したのであろうか。例えば、発話時に相撲興行が行われており、相撲好きの(6A)はそのチケットを2枚手にして(6B)に向かって話しかけている状況を考えてみれば、(6B)が(6A)の発話内容とその発話コンテキストをもとに(6A)の発話意図を<誘いかけ>であると推論し解釈したと仮定することができる。なお、何かを依頼したり誘いかけたりする場合、疑問文が用いられることは慣習的でもある。要するに、(6B)は(6A)の発話内容に加えて、発話のコンテキスト、慣習といった言語外の要因を材料として(6A)の発話意図を導出したのである。

次に、(6A)は自身の<誘いかけ>に対する返答(6B)をどのように解釈するのであろうか。(3)で見たと同様に、通常、(6A)は返答(6B)を(6A)の発話内容と関連があるものと仮定する。例えば、「仕事があれば、それを行うのに時間がかかる」「相撲見物に行くとなれば時間がかかる」等のような言語外のテキストからの仮定と(6B)の発話内容をもとに演繹的推論を行い、その結果「相撲見物には行けない」というような結論を(6A)は了解するのであろう。そこでは、(6B)の相撲の好悪が問題にされることはない。

- (7) 前提：相撲見物には時間がかかる。
 Bには仕事がある。
仕事には時間がかかる。
 結論：Bは相撲見物には行けない。

なお、(6B)の返答は<誘いかけ>に対する<断り>の表現という観点からさらに詳しく分析することができる⁹⁾。

ここでは、従来、直観的に理解されるものとして顧みられることのなかった(3)のような<尋ね—こたえ>の場合、また(6)のような<依頼—断り>の場合について、そのように理解され、解釈されることになるためにはどのような具体的な過程を経ているか、その内実について関連性理論、語用論を参考に概観した。

4. 2 発話態度の意味解釈

本稿における「発話態度」とは、発話者が発話行為をどのような心的態度で行うかということである。すなわち、日常の言語生活では通常、人は誠実な態度で協動的に会話を行っているが、時に冗談を言ったり、皮肉を言ったり、嘘をついたり、高飛車または窮屈な態度で発話することがある。そのような発話の仕方（態度的意味）においては話し手の意図的意味（発話意図）が顕著に含まれていると考えられる。このため、いま、次のように整理しておく。

- (8) 話し手の意図的意味（発話意図）
- ① 発話行為……発話の機能、会話の含意、間接発話行為
 - ② 発話態度……発話の心的態度、すなわち態度的意味

これまで述べてきたとおり、発話は文意が理解できたとしても、解釈は、そのコンテキストが与えられなければ、必ずしも一義的に確定するとは限らないものである。

例えば、次の(9)からは通常、「ある人または人々が難しい勝利を手にした」というような文意の理解をもとに、そこに安堵、感心とでもいった心情を感じ取ることができるであろう。しかし、実際に(9)が使用されたコンテキストとともに(10)に示す。

- (9) 「よく勝てました。」
- (10) 逆転勝ちに沸くベンチに腰をおろした野村監督は「よく勝てました」と皮肉っぽく話し始めた。毎回の13安打を放ちながら13残塁と逸機続きだった展開が、何より面白くない。「うちの打者は勝ちたい一心で、どんな球にも食いつくダボハゼばかりや」。(毎日新聞 1997.5.24 朝刊)

(10)から明らかなように、「よく勝てました」は通常、予測されるような感嘆でも、称賛でも、また安堵や感心でもなく、実際の発話の場では<皮肉>の意味を有している。つまり、勝てない試合に逆転勝利を収めたというわけではないため、監督の言葉(9)を文字通りに感嘆や安堵のように解釈することができない。改めて言語表

現についてみると、「よく」という語の使用にも理由がある。この「よく」は可能表現と共起して「よく来られたなあ」「よく平気でいられるな」「よくあんなことができたものだ」のように、尋常ではない事態に対して感心したり非難したり、あきれたりする気持ちを表すからである。

こうしてみると、言語外世界の事態、すなわちコンテキストが「よく勝てました」という発話の意図的意味を規定していることが明らかである。実際、野村監督が<皮肉>として言ったかどうかは当人にしか分からないため、記者はコンテキストをもとにその発話を<皮肉>と解釈した上で「皮肉っぽく」という断定を避ける表現で記述しているのである。この場合、野村監督の口調もまさに皮肉っぽかった（記者が皮肉を感じ取ることができる話しぶりであった）と想像される。このように、話し言葉のコンテキストにおいては話し手の話しぶり（音調、速度、明瞭さ等といった発話の仕方）を考慮に入れる必要がある点、留意しなければならない。

さて、発話態度について、深谷・田中（1996）は嘘をつくのではなく、誠実な態度でありのままに語ることを「基本的発話態度」と見なし、これを「誠実性の条件」と呼んでいる。本稿でもこれに従い、以下、<皮肉>の場合を例に発話態度の意味解釈を考える。

次の例(11)は、通常、「誠実性の条件」のもとに理解され、解釈されることになる。

- (11) きみの服、素敵だね。

しかし、もし相手がひどい服であり、面白半分にかからう気持ちで(11)を発した場合、話し手は不誠実な態度であるために発話意図は<ほめ>ではなく、例えば<皮肉>ということになる。この場合、<皮肉>といった発話意図は、(11)を文字通りの意味として理解する以上、得られるものではない。したがって、例えば相手の服の客観的な状況や話しぶりの異常さ等といった発話解釈の手がかりとなるコンテキストが不可欠となる。

いっぽう、(11)の聞き手が、自分の着ている服が素敵だと自身が認識していれば「真実が誠実に語られた」と解釈するのに対し、逆に自分の着ている服がひどい服だと自身が認識している場合には「これは皮肉だ」と解釈するであろう。つまり、話し手の発話意図は聞き手の解釈に依存することになる。このことは、たとえ相手が次のように答えたとしても変わらない¹⁰⁾。

- (12) A：きみの服、素敵だね。
 B：本当にそう思う（文調：上昇調）。ありがとう。

さらにまた、自分の着ている服がひどい服だという(12B)の認識の存在を仮定しても、(12A)の発話を契機にそれが変質してしまうこともあり、(12A)の発話のみによる基本的発話態度に基づく発話意図の解釈には困難があるばかりか、(12B)の返答をもってしても事情は同じなのである。その場合、最終的な解釈、一義的確定には

これ以上の話し手、聞き手についての情報を始めとする新たなコンテキストが不可欠となってくると言わざるを得ない。

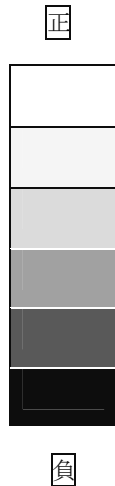
さて、以下、発話態度<皮肉>を含意する表現を「アイロニー表現」と呼ぶことにしよう。すると、アイロニー表現は文字通りの意味と発話者の意図とが一致せず、食い違う表現であるということになる。言語表現は、(9)で見たように、コンテキストに依存しなければ文字通りの意味として理解されるのが通常であるいっぽう、時にコンテキストから文意とは異なる<皮肉>等の意図が解釈されることがあるのであった。しかしまた、次に挙げるようなコンテキストから離れて、つまりコンテキストが与えられなくともアイロニー表現として確定しやすいものが存在する。

- (13) おめでたい男 要領がいい 口が達者だ
いい格好 いい子になる しっかり者
調子がいい 調子に乗る……

なお、この中でも<皮肉>の意味が確定的な「おめでたい男」から、必ずしもそうとは限らない「調子に乗る」までには程度差が認められる。しかし、そこに共通しているのは文字通りの意味として正の評価性が認められるという点である。とりわけ、「いい」については次の(14)に示すような正と負の評価性において連続性を持つことが注目される。オ～クでは<皮肉>を言語形式が慣習的に担い、ア～ウでは必ずしも慣習化してはいない。そして、エ「いい加減」の辺りが両者の境界部分(中間部分)にあたるのではないかと思われる。

(14) 「いい」の評価性

- ア いい書物
イ いい性格
ウ いい関係
エ いい加減
オ いい気
カ いい気味
キ いい面の皮
ク いい迷惑



上述の<皮肉>のように、心的態度である発話態度が言語形式と必ずしも結びついてアイロニー表現として慣習化していない場合(ア～ウ)、それが<皮肉>であるか否かの観察の手がかりはコンテキストに求められることになる。ここでも、改めて「発話意図のコンテキスト依存」を指摘することができる。

なお、小説では、次例のように発話意図となる<皮肉>の解釈に関して作者が明示的に与える場合がある(下線は論者)。

- (15) 「遊んでいて飯が食えると自由自在にそんな気持ちも起こるだろうな」

何を太平楽を言うかと言わんばかりに、父は憎々しく皮肉を言った。

「せめては遊びながら飯の食えるものだけでもこんなことを言わなければ罰があたりますよ」

彼〔息子〕も思わず皮肉になった。父に養われていればこそこんなはずかしめもうけるのだ。なんという弱い自分だろう。彼は皮肉を言いながらも自分のふがいなさをつくづく思い知らねばならなかった。(有島武郎「親子」)

5. おわりに

発話はその文字通りの意味をそのまま発話意図として了解することが許されるとは限らないものである。そこには広義のコンテキストが存在し、「理解」を越えた「解釈」が求められる。

本稿では、その解釈過程について整理を試みた。そして、言語形式と発話意図との関係が端的に表れる<皮肉>を取り上げ、基礎的な考察を加えた。

発話の心的態度である発話態度をどのように捉えるかについては、内省・コンテキスト・小説の地の文等に依存するものであるが、いっぽうで言語形式との結びつきをいっそう考慮に入れていくことは今後に残された課題である。

注記

- 1) 主客が分化した表現である「私は歩き疲れて足が痛い。」と比較すると明らかであろう。
- 2) 以後、区別の必要のない限り、便宜上、「発話文」を「発話」と略すことがある。
- 3) 例(1)(2)については小島(1988: 第5章)参照。
- 4) アクセント、イントネーション等の音声的要因についてはここでは考えない。
- 5) 森山(1990)、熊井(1992)他。
- 6) 例(12)及び考察は、深谷・田中(1996)に基づく。

参考文献

- 1) 内田聖二他訳、D.スペルベル&D.ウイルソン『関連性理論—伝達と認知—』1993、ひつじ書房
- 2) 熊井浩子「外国人の待遇行動の分析(2)—断り行動を中心にして—」『静岡大学教養部研究報告』28-2、1992
- 3) 小島義郎『日本語の意味 英語の意味』1988、南雲堂

- 4) 西山佑司「発話行為」『英語学体系 5』1983、大修館
- 5) 深谷昌弘・田中茂範『コトバの<意味づけ論>』1996、紀伊国屋書店
- 6) 宮地裕「表現意図」『話しことばの文型(1)』1960、秀英出版
- 7) 森山卓郎「『断り』の方略—対人関係調整とコミュニケーション」『月刊言語』19-8、1990
- 8) 山田孝雄『日本文法学概論』1936、宝文館出版

【付記】

本稿は『川北泰彦先生退官記念論集』（奈良教育大学漢文学研究室 2003.3）掲載の同名論文に加筆、修正を行ったものである。